



新潟の水辺だより

Vol.45

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1998年8月10日 Vol.45

TOPICS

通船川・栗ノ木川下流再生市民会議の発足に思う

大熊 孝

かつて阿賀野川は海岸線に沿いながら信濃川に合流していました。通船川は、その阿賀野川の名残であり、現在では阿賀野川と信濃川を結び、新潟市街地を流れる約8.5kmの都市河川です。1964年の新潟地震以後、この両岸には鋼矢板護岸が施され、地盤沈下などの影響もあって、その河川水位を日本海の海面より約2m引き下げ、山ノ下排水機場からポンプで強制的に排水する方式がとられています。栗ノ木川は山ノ下排水機場近くで通船川に合流する支川で、現在は連絡が絶たれていますが、かつては鳥屋野潟から流れてきていました。



基本原則を話す大熊会長(撮影:中村翼)

これらの川が直立の護岸や水質悪化などで市民との関係が薄れていましたが、通船川ルネッサンス21(代表:星島 卓美氏)などを中心に、この川を再生しようという市民運動がここ数年高まってきました。そのことは、今までの「水辺だより」でも何回か報告されてきたところです。

こうした市民の運動を背景として、新潟県と新潟市の行政担当で構成されている「通船川・栗ノ木川再生検討委員会」からの呼び掛けによって、このたび市民と行政が一体となって川の再生を探ろうという

「通船川・栗ノ木川再生市民会議」が結成されました。これは、昨年1997年に河川法が改正され、河川の具体的整備方針には住民の意見を取り入れなければならないとする主旨にも沿ったものとなっており、河川法改正後の全国初の試みではないかと推察しています。

その第1回の市民会議が、6月9日18:00~20:00に万代市民会館で、市民107人の参加のもと開催されました。そこで、光栄にも私がその会長に選出されました。今後、この市民会議でいろいろ議論され、通船川・栗ノ木川の具体的な整備方針がつけられていくと思いますが、その市民会議の進め方の基本原則を少し述べておきたいと思います。

市民会議を進める上で大事なことは、行政と市民の意識のずれは無論のこと、市民同士でもさまざまな見解があるのですから、まず通船川に関する共通認識を高めることが必要であると思います。次いで、その共通認識のもとに、川と人間との関係を再生するうえで必要な原理原則を確認し合うことであると思います。おそらく、市民や行政のそれぞれの立場によって、その原理原則に近い考えを持った人もいれば、遠く離れた人もいるものと思われます。その場合、全員をその原理原則に一致させることは、遠く離れた人には大変な無理がかかり、なかなか合意が得られず、その原理原則を作ることさせ難くなるがあると思われます。そこで、その原理原則に向かって一歩でも近づければ良いという、ゆるやかな「ベクトル合わせ」という考え方で原理原則を立てていくことが肝要でないかと考えます。原理原則が確認できれば、それぞれがそれに向かって、徐々に時間をかけながら一歩一歩近づけばよいわけであります。要は、人それぞれで出発点が違うので、その違いを尊重しながら、互いを信頼して方向性を同じくすることが、話し合いを上手に導くコツではないかと考えています。皆さんの御協力をお願いする次第です。

里山を利用した野外体験基地づくり 雪国自然学校 西岩寺キャンプ

よく指摘されることではあるが、山や川で子供の姿を見ることが本当に少なくなった。私たちの幼少の頃の異年齢地域子供集団(山ガキ・川ガキ)は昭和30年代半ばにはほとんど消滅してしまっただようである。無菌培養の家畜化現象が進み、日本人の生物としての活力は低下の一途をたどる。代わって最近目立つのはブラックバス釣りの若者や、山野草を根こそぎ持ち去る大人たち、そして後に残されたゴミの山。

これまで我が国では子供たちを自然から遠ざけることはあっても、体系だった野外教育・環境教育は全くなされてこなかった。自然の中で日常生活では得難い実体験を積む機会は益々重要になってきているが、同時に自然とつきあう上での基本的な技術やマナーを身につけることが求められている。

自然学校づくりはずいぶん前から暖めてきた構想である。自分達の手で青写真を描き、施設やソフト面まで具体的に展開したいからである。県内各地で適地を探し、昨年秋に最後にたどり着いたのが、古くからの友人でシベリア自然探訪の旅も共にしている小千谷市岩沢の渡辺 俊英さんのお寺の山である。ここ西岩寺の裏山は、雄大な山岳風景はないものの信濃川にも近く、広大な広葉樹林と休耕地が点在する自然豊かな典型的な里山である。

雪国自然学校西岩寺キャンプでは、①野外教育・環境教育、②創造性、③食と健康、④自然の循環、⑤地域主義の5本柱として、年間を通じて多彩なプログラムを展開していく予定である。具体的には、近隣の春夏秋冬の里山と信濃川を舞台にした野外体験やビオトープ作り、キャンプ周辺の自然素材を使った各種ネイチャークラフト、休耕地を利用した古代米や雑穀栽培、山菜等の自然の恵みの

利用、自然エネルギー・雨雪利用、炭焼き等である。

インディアンティピーに泊まりながら、身近な友人の力を借りて施設作りに取り組んでいるが、7月中旬現在、キャンプまでの管理道が完成し、ダイニングテント等の整備が終わり、古代米や雑穀栽培を開始したところである。今後観察路や森の広場、ツリーハウス、ビオトープ作りなど、多数のみなさんの力をお借りして進めていきたいと考えている。今夏の暫定オープンを目指して会員・ボランティアを募集する計画であるが、詳しい内容のお問い合わせは下記西岩寺キャンプまで。



ダイニングテントの骨組み
大幅に強化した耐雪構造

〒949-8724
新潟県小千谷市岩沢市之口
雪国自然学校 西岩寺キャンプ
Tel.030-06-33167
Fax.0258-86-2927
井上 信夫

三川村「細越の森」開設

細越生産森林組合が栗園跡地2町歩ばかりを貸し出すという話を耳にした時、下流住民がこれを一括して借りることが出来れば、上流の緑が健全であって、初めて毎日の生活水を得られる下流と、土地の活用に苦慮している上流とが、共にお互いのためになる道を模索し合っていく一歩が開けるのではないかと思った。

新潟市から車で丁度1時間。標高200～300mの現地まで道路は舗装されている。草地と雑木の中にわずかに栗の木が残っている。すぐ南手に600mの笠菅山を仰ぐ。すぐ下手8町歩はまだ栗園が健在。

年間10万円の借地料を1口2千円の賛同金で賄いながら運営していく計画である。



五月の「細越の森」山菜の宝庫(撮影:尾形昭成)

下流住人が自ら水源に入ってから地元の人と交流しながら森と関わることを追っていきたい。山の幸を下流が収穫するのではなく、分かち合う道を模索できないか。山が健全であるためなら、ある程度の出費は厭わないという人達の思いを實際行動に表していく格好の術となり得るのではないか。

賛同者を募っています。

「山林ボラン広場」事務局 尾形 昭成

体験 通船川カヌー下り

7月26日(日)、フェーン現象による猛暑の中、通船川カヌー下りに参加しました。当日の参加者は親子連れやカヌーは全く初めてという人も含めて約20名。



通船川 新川町付近の様子(撮影:杉山泰彦)

阿賀野川泰平橋下流を出発し、津島屋閘門を経て、通船川に入り第2貯木場までの約6kmのコースでした。

阿賀野川を下っているときは、流れに乗っていればカヌーが進んだことと、雄大な眺めと自然豊かな水辺の景観もあり、極めて快適でした。

津島屋閘門を体験した後、いよいよ目玉の通船川に入っていきます。通船川は流れがほとんどないことはもちろんですが、水面近くからの眺めも延々と続く矢板のためかゴールまでの道のりは長く感じました。ところどころカヌーでさえも底を擦るところもありました。

当日は貯木場に関係する企業にご協力頂き、ゴールの第2貯木場に筏と陸に上がるためのハシゴを用意していただきました。これがないと、私達が陸に上がりカヌーを引き上げることは不可能だったと思います。

最後に、今回のカヌー下りに御協力頂いた皆様に感謝申し上げます。

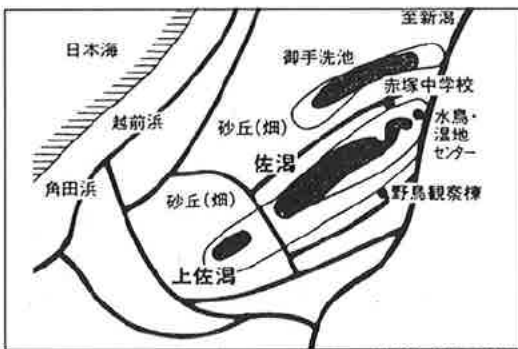
杉山 泰彦

佐潟フォーラム(茶話会)

6月6、7日と続けてラムサール条約登録湿地を訪れる機会があった。6日は「水辺の会」によまれて、オープンしたばかりの佐潟水鳥湿地センターでの「佐潟フォーラム設立記念会」へ、翌日は千葉県習志野市の谷津干潟で、オーストラリア・ブリスベンのラムサール湿地「ブンダル湿地」と姉妹湿地関係をむすんだことを記念するシンポジウムに参加した。

2つの湿地は自然環境も渡ってくる水鳥もそれぞれ異なっているが、指定水面の面積が約40ヘクタールであること、大都市の近郊にあって周囲を人間活動に取り囲まれている点など共通部分もある。

佐潟フォーラムでは、地元の赤塚の農家や学校の先生たちの、むかしからなれ親しんだ佐潟がラムサール湿地になったことへの当惑や期待、疑問などについての率直な意見交換に感動した。実は翌日の谷津干潟シンポジウムでも周辺住民から、自分たちが見守ってきた干潟が有名になったことへのうれしさとうらはらに、違法駐車やゴミ投棄、交通渋滞などの問題がいろいろ指摘されていた。



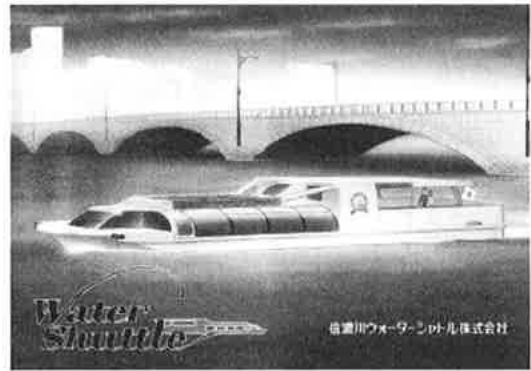
佐潟周辺の地図

両方の湿地ともラムサール条約に登録されてからの歴史は短く、新しいルールづくりへの模索の段階なのだろう。しかし、地元のひとたちを中心に湿地に関心をもつさまざまな人が意見をいったり、自発的に活動に参加できる土壌が早くも育ちつつあることに感心し、安心した2日間だった。

ラムサールセンター事務局長 中村 玲子

信濃川ウォーターシャトル
いよいよ1号船建造に着手

信濃川に水上交通を復活させようという信濃川ウォーターシャトル計画は、6月3日の舟運シンポジウムでも話題の中心となり、渡辺貴介先生の基調講演でも熱いエールを頂戴しましたが、全国からもユニークで具体的な取組みと注目が集まっています。



「信濃川ウォーターシャトル」イメージ図

期待の1号船の仕様が固まり、造船所との厳しい価格交渉も、何とか船主の希望に近い線で成立する目処が立ち、8月上旬にも起工式を行なう予定です。世界で一番美しい19t船を目指し、機能的にもデザイン的にもよく纏め上げることができたと思います。年末には実際に信濃川に浮かべられる予定ですので、どうか楽しみにして下さい。

さて、8月31日まで第二次の一般公募増資を行っております。まだ当社の株主となっていない方は、ぜひともこの機会に株式のお申込みをお願い申し上げます。1号船を使った各種のイベント企画が目白押しです。(信濃川ファンクラブ様から来年度の総会で新潟一長岡往復クルーズのお申込みを頂戴しました。丸一日かけて、のんびりと初夏の信濃川を航行します。)

信濃川ウォーターシャトル株式会社
代表取締役社長 栗原 道平

信濃川音楽祭 信濃川ファンクラブ

川の価値の見直し、芸術文化創造、地域の活性化という三つの旗印をかかげ、7年目を迎えた『しなの川音楽祭』。今回から、交響曲第2番『風』の章が始まる。ちなみに過去6回は交響曲第1番『水』の章。風はコミュニケーションを意味する。風のたよりなどというがごとく……。つまり上下流の連携、特に信濃川の上流である千曲川を意識している。上下流が良いコミュニケーションをとりながら、水系の思想に基づく流域を単位とした循環型社会システムを築くため、微力ながら力を尽くす。例によってメニューは多彩。お楽しみに！

中島 太郎

交流会議 通船川舟運ワークショップ

1998年6月20日、舟運の復活を考えるワークショップが開かれ、30名をこえる市民が参加しました。

まず、舟によるウォッチングが行なわれ、橋の桁下の高さを測量したり、自然や景観の観察をしました。

「思ったより水がきれいだ」「コアジサシをはじめて見つけた」「水位が低くて景色が楽しめない」「低い舟を使えば航路として復活できるのではないかな」など、活発な意見が出されました。

この模様は、1998年7月10日、NHK教育TV「金曜フォーラム」の中で放映されました。

世話人 石月 升

「これまでの都市緑化とこれからの都市の緑へ」 ～全国都市緑化フェア新潟県テーマ展示ゾーン～

都市の緑は水辺の姿を変えたものとして重要な役割機能と存在感を持っています。8月1日から開催された都市緑化フェアにいがたを水辺からどう捉え直せるか考えてみましょう。水辺の会の初期からの会員でもある建築家池田博文さんの呼びかけで、県内7社の若手造景家約10名で「大地の庭」という新潟県のテーマ展示をゲート脇のカナール端部の空間を展示素材にして開催しています。

●県のテーマ展示「大地の庭」は

1) 場を生かす

会場の空間構造、立地、歴史的特性を成長させられるか？

2) 造り手、使い手、守り手の相互の協働

互いに考え、体験し共有できるか？

3) 地域の資源や技術の循環

地域の素材や技術活用、リサイクル、新開発と成果の還流循環は？

3つの展示方針で問題提起しています。

また、水辺の会会員の登場する8月8日～10月17日まで隔週土曜日午後、6回の「大地の庭フォーラム」を開催します。その他5回の大地の演奏会を開き、8月30日午後2時～3時には森本世話人の「水辺の怪バンド」演奏が、9月27日には石月、星島世話人の「佐潟のハスを喰う」食のワークショップがあります。

世話人 相楽 治

みんなの信濃川を考える 「水のにいがた98信濃川フェスティバル」

昭和62年から始まりました信濃川フェスティバル、今年で12回を教えることになりました。

今年は、『信濃川』をもう一度見直し、親しみをもって川との共存を図りながら21世紀に向けて「みんなの信濃川」を考えることとして、下記のとおり行なわれます。



昨年のやすらぎ堤の模様

記

日時 1998年8月23日(日)10:00～15:00

会場 信濃川やすらぎ堤(昭和大橋上流)

主宰 水のにいがた98信濃川フェスティバル実行委員会
実施内容

- ・信濃川をもう一度見直す「ステージイベント」
- ・信濃川に親しみを持つ「出店・遊びイベント」
- ・信濃川と共存する「川との共存イベント」

建設省信濃川下流工事事務所 管理課
電話025-266-7135

「NPO(特定非営利活動法人)をどう 生かす？」学習会に80名参加

7月7日夜、新潟市の「まちづくり講座」(市の職員20名、民間人20名でのワークショップ研修講座無料)の指導で来港されていた千葉大・客員教授林泰義氏を招きNPO学習会を開きました。林氏は「NPO教書」(会で50冊著者割りで販売)の著者で日本にNPOを紹介した第1人者です。

水辺の会と新潟ワークショップ研究会、市西港周辺整備対策課との共催の(仮)にいがたNPOネットワークで、60名定員の部屋に60名参加予定で80名が急遽集まって林氏の講演を聞いた。

アメリカのNPOと日本のNPOと2本立てのわかりやすい話だった。アメリカの120万のNPO団体には専門知識のある専従のプロスタッフがいる市民セクターが公共事業をして収益をあげている。…ボランティアという個人を主体とした団体がNPOというわけではなく、営利団体のように利益配分をせず非営利で収益をあげ、団体の目的のために再投資してゆくのNPOであるという。ボランティアに多くの支援を受けるが明確に目的達成を第一義に持ち、専従スタッフを抱え自立自発的にそして組織的持続的な組織を創らないと、「市民の担う公共事業」ができない。そういう戦略をもって市民運動をしないと個人的に疲れてしまい、普遍性持続性のあるものにならないという危惧がある。今後はすでに立ち上がっているという北海道、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡など他のNPO支援センターの現場の実践者を講師に招き話を伺いたい。そこで新潟でのNPO支援センターなどの可能性を皆さんと検討してゆきたい。

世話人 相楽 治

「川の日」全国ワークショップ ～東京ビックサイト会場～

7月7日は七夕の日だ。天の川を挟んでの物語だが、全国的に「川の日」ということから市民の想う、いや想い入れる「いい川」と「いい川づくり」をしているお役所の担当者が顔を並べて「こっちの川がいい川だ。」「あいや待たれい。こっちの川の方がい

い川だ。」と自薦、他薦が100以上集まったから大変。審査基準がマチマチ。

わが通船川は際どく落選。小阿賀野川は敗者復活戦で受賞でした。まあ、日頃顔を合わせない市民と建設省の担当者と一緒に川を考えたことが最大の収穫か？



通船川について話す星島さん(撮影:相楽 治)

星島さん石月さんご苦勞さん。来年は地区予選をしましょう。

世話人 相楽 治

屋久島

5月29日、屋久島に着いた瞬間に湿った大気に包まれた。川辺にある宿の周辺を歩いていても草や木々の匂いがしっとり伝わってくる。年間雨量最大8千ミリの屋久島の照葉樹林の中は若むした深い緑の世界だ。森の中は太陽の光が届かず、下草がはえない。道がなくてもどこでも歩けるので迷子になるかもしれない。これが何千年も生きている杉達を育てた風土だ。とにかく木々がおもしろい。一本の樹に数種の樹や植物たちが寄生し共生して生きていたり、絞殺木のガジュマルやアコウが大木に巻付き、木と木が戦っている。アコウはそれぞれの木が季節にとらわれず花を咲かせ、実を結ぶと聞いた。なんと、子孫の残し方が人間や猫と同じではないか。

念願の縄文杉に会うにはトロッコ道を2時間、さらに険しい山道を2時間登る。このトロッコ道を多くの屋久杉が切り出されたかと思うと痛々しい。残された屋久杉達の数千年の命に感嘆した。

大熊 宏子

会員紹介

MEMBER'S



伊藤 佳代子

(写真：左側)



山あいに流れる川の「景色」がとても好きです。東蒲の鹿瀬・津川・三川ラインは景色をみているだけで気持ちが和みます。

現在、私用と重なり、会に参加することができず、会報を通じた参加ですが、これからもよろしくお願ひ致します。



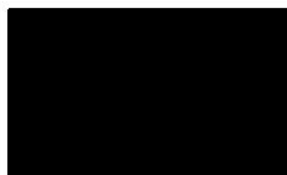
横山 通



子供の頃、村上の三面川の中流域で夏休みに遊んだことが強く印象に残っています。それはさておき、通船川、西川植樹草刈り隊を結成出来ないかと考えています。苗木を植え約10年間の草刈り、下枝の切り落としなどを経て、両河川に緑の回廊と種の供給地を作り出そうというものです。よろしかったら一緒にやりましょう。



山田 宏高



今年、下田村に新しい祭りが誕生します。村の中心を流れる五十嵐川の源、吉ヶ平の雨生ヶ池の伝説に基づいた祭りです。

その祭りのクライマックスとなる所が、私の好きな水辺、白山橋の下です。鮎も増えました。是非遊びに来て下さい。(祭り→8月22日(土))



千明 恵津子



生まれは新潟の下町です。何度も引越をしましたが、小学校入学と同時に住んだ家は、「新潟館」と言う映画館の跡地を1/2にして建てた家でした。映写用の土台の上がボチの犬小屋で、私と大の仲良しで12年間も遊んでもらいました。その後は2~3匹飼いましたが、長くは生きませんでした。今一番の楽しみは、花を育てる事です。毎朝30分位、花に語りかけています。一輪でも良いから花の絶えないようにしたいと思っています。私の好きな水辺は、雪どけの頃の魚野川の流れです。



瀧谷 與一

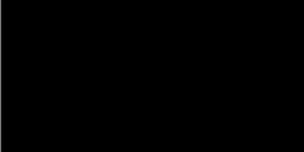


特技は囲碁田舎六段です。その他、釣りを趣味としています。

若い時(12歳~23歳)は、日本の各地を旅をしていました。海も大きな、大きな水辺だと思っています。



豊田 智慧子



生まれは広島、育ちは富山。滑川高校の生物クラブで「クロサンショウウオ」を見にいたり立山の高山植物「黒ゆり」などの名前を教わったり、ヒキガエルの骨格標本づくりをしたりしました。趣味は、コーラスと文学。信濃川の川辺をてくてくと上流にむかって歩きたいです。

EVENT INFORMATION

水辺の会関連98年活動予定

- ▲8月22日(土)～23日(日)第9回全国トンボ市民サミット-神戸大会
申し込み・問合せ:第9回全国トンボ市民サミット神戸大会実行委員会事務局
/電話078-392-1577
- ▲8月23日(日) 水のいかにた98信濃川フェスティバル
10:00～15:00/信濃川やすらぎ堤(昭和大桥上流)/問合せ:建設省信濃川下流
工事事務所管理課/電話025-266-7135
- ▲8月29日(土)
上海・桂林ツアー説明会/世界の水辺:中国桂林の水辺を考える学習会
13:30~/新潟市東地区公民館/電話025-241-4119
- ▲8月30日(日) 信濃川・中ノ口川三川合流シンポジウム
白根市カルチャーセンター・サブアリーナ/問合せ:高橋裕雄/電話025-379-2794
- ▲9月 都市河川学習会
通船川ネットワーク/新潟市東地区公民館/電話025-241-4119
- ▲9月12日(土) 通船川クリーンアップ作戦
東山の下小学校、藤見中学校、地元企業、大江山漁協、地元住民/星島世話
人/電話025-241-4119

- ▲9月中旬 新潟市外の河川・湖沼視察/森本世話人
- ▲9月26日(土) 講座「信濃川」
長岡商工会議所:主催/信濃川ファンクラブ・信濃川音楽祭
- ▲9月26日(土) 佐潟ハス採り大会/相楽世話人
- ▲9月27日(日) 佐潟のハスを食べ濁るワークショップ
全国都市緑化フェア「新潟緑のものがたり98」県テーマ会場/石月世話人
- ▲9月27日(日) 信濃川Eボート大会
場所未定:主催/信濃川ファンクラブ
- ▲10月3日(土)～7日(水)中国「上海・桂林5日間の旅」
高橋正良編集鳥(長)/025-234-1153
- ▲10月24日(土)水辺シンポジウム98
～都市河川:佐潟・通船川の再生へ向けて～
新潟市万代市民会館/午後から/ゲスト未定:「鶴見川(バウハウス)大沢氏/
信濃川ウォーターシャトル栗原氏/通船川ネットワーク梶代表/佐潟フォー
ラムの高野さんなど(予定)
- ▲10月31日(土) 菅名岳 桂清水探勝
- ▲11月7日(土)～8日(日)
水郷水都全国会議気仙沼大会「森は海の恋人」

- 夢に見た山水画の世界 あこがれの、あの桂林 -

上海・桂林の旅

上海は高級ホテルに感激!!
桂林は漓江下りに驚嘆!!



漓江下り(川エビがうんめえ～よ!)

1998年10月3日(土)～10月7日(水)
4泊5日の新潟の水辺を考える会初めての海外ツアー
新潟空港発着 - 159,000円(税別)
(一人部屋の場合25,000円追加)

説明会開催 1998年8月29日(土)13:30～
新潟市東地区公民館 305号室

●スケジュール

- 10/3(土)
夕刻新潟空港発 上海高級ホテル泊
- 10/4(日)
空路 桂林へ移動 桂林観光 桂林ホテル泊
- 10/5(月)
桂林 漓江舟下り 桂林ホテル泊
- 10/6(火)
空路 上海へ移動 上海市内観光 上海高級ホテル泊
- 10/7(水)
上海発 新潟空港着

※申し込み締め切り15名程度。
ご夫婦参加が多数あります。



上海観光

●企画・申込先

1997年10月旅行経験の高橋編集鳥(長)
電話025-234-1153 FAX 025-234-1173
e-mail:masayosi@on.rim.or.jp

編集後記

今年の季節は例年になく早くめぐっている。自然とふれあう人に聞くと、14日から一ヶ月以上例年より早い、という答えが返ってくる。渡り鳥が早くやってきた。新潟市関屋の松林で野鳥のバンディング調査(足環取り付け)をしている方々も「早い」の一言。川も早くから減水した。6月いっぱいまではフライフィッシングを楽しむ、という表現がぴったりだった。7月の声を聞いたとたん、釣りあぐねることになってしまった。新潟ではフェーン現象がこれに輪をかけてやってきた。薄暗い溪流でも水温が19度以上ある。今年の夏はイワナやヤマメもつらそうだ。

編集鳥(長)高橋 正良 masayosi@on.rim.or.jp

書籍紹介 『自由論』

著者:内山 節 2,000円(税別)
出版:岩波書店

そのとき、畑の石は取り過ぎないようにと云った村人のことを思い出した。作物は、ほとんどは畑の土の力によって育てられている。その土を、畑に暮らす小動物たちがつくっている。その小動物たちを、小石が夏の日照りから守っていた。石もまた、一つの役割を演じながら、この「場所」に自由な存在をもつ仲間なのだ。…私は、この「場所」の石と畑の関係のなかに芽生えた生命の自由さ、とでもいふべきものを感じていたのである。(本文より)

- 事務局 株式会社グリーンシグマ内(OZE0677@niftyserve.or.jp)
〒950-2111 新潟市大学南1丁目7821-5
Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134
- 編集局 株式会社サザンウインド内(e-mail:masayosi@on.rim.or.jp)
〒951-8134 新潟市関屋1422-10
Phone 025-234-1153 Fax 025-234-1173
- URL <http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html>